家族と継承していく建設業の魅力

飯田鉄工株式会社　電力営業部　望月　勇希

私が建設業界で仕事をしたいと思い始めた理由は父が電力会社にて勤務していたことがきっかけです。
私は子供の頃から現在の仕事と密接に関係している水力発電所をよく見学していました。
当時は父の説明を聞いていても理解が及ばず、ただ発電に使用する巨大な鉄管や水門が魅力的に感じており、その設備の大きさからとても責任がある仕事をしていると子供ながらに誇らしく思い、いつかは自分も責任ある仕事をしていきたいと考えていました。
私が父の仕事を深く知るようになったのは2011年に発生した東日本大震災の際に原子力発電所の事故対応の関係で父が福島県に出張していた時でした。
東日本大震災が発生した3月11日は私が受験した高校の合格発表の日でした。
震災が発生した直後に父から連絡があり、緊急対応で福島県に向かうかもしれないと連絡を受け
家族のことを頼むといわれました。その時に私は子供の頃に見た水力発電所を思い浮かべ改めて父の仕事が重責であることを再確認しました。
福島県に出張した父は放射能汚染された冷却水の貯水タンクを設置する工事を行っており現場ではトラブルが多発し難工事であったと聞きました。帰宅した時に一日中テレビに張り付きニュースを見続け、福島県の様子を常に確認していました。
施工した貯水タンクにトラブルが発生しないか常に気に掛けているのと同時に何か問題があればすぐにでも福島県に掛けつけそうな雰囲気を父に感じました。
貯水タンクの建設に関わった同僚の方たちから電話を受け無事に運用していると連絡を受けて安堵していたのを覚えています。
漠然と幼少の頃から父の仕事の責任を感じていた私は高校時代から建設業界は責任とやりがいのある仕事だと思っていました。
そんな中で現在は父の仕事にも関係している水力発電所の水門・水圧鉄管の製作、据付を行う会社に就職し、営業業務のほかに現場管理も行っています。
はじめのうちは知識も経験もなく戸惑う日々でしたが、現場で完成していく建設物を見ていると子供の頃にみた水圧鉄管や水門を思い出すとともに、工場で製作した製品を近くで見られ面白いと感じるようになりました。
現場での完成が近づいていくにつれ、お客様との折衝や社内での打合せなどの苦労したことが頭に浮かびました。
ついに完成まで来ることができた時には自分の中で自然と感動が呼び起され、同時に経験による自信がついたと感じました。
また営業業務の中でお客様が抱える問題を解決したこともあり、実際に感謝されることも

多いです。
私が高校時代に父の経験していたことを今の会社で感じることができ、多くのトラブルや難航している問題を解決していくことが、建設業の魅力であるという考えに至りました。
営業業務とはいえ必ず自分が受注した案件に関しては最後まで責任を持って現場に赴き進捗状況や現場作業を見るようにしています。
現場では図面上で確認することができない作業や細かい部品等を見ることができ、すべての経験が後に生かせると思っています。
その経験は、やがてお客様の問題解決につながっていき、難工事を乗り越えることができると考えています。父が震災時に事故対応したような困難も必ず乗り越え安心と安全を多くの人に届けることができるのではないかと思います。
規模の大小ではなく、すべての工事でやりがいを感じ仕事を遂行することができると考えています。
また建設業は慢性的な人手不足で、知識や経験が豊富で多くの工事現場を経験しているベテランも次第に仕事を引退していき、その知識と経験が失われないように吸収し、自分と同じようにこれから建設業に魅力を感じ、仕事を一緒にしていく後輩たちに伝えていくことが自分たちの使命であると感じています。
親の姿を見てきた事もその一つであると考えています。これからも引き続き建設業に関わるものとして常に責任とやりがいを感じながら、様々な工事を経験し成長していきたいと思います。
完成した製品の達成感こそが建設業の魅力だと思います。